経営者・指導者向け

外国人の【日本語教育指導情報】

月報 130 号

ことばの研究社
TEL 086-486-1742
FAX 086-486-1744
kotoba ken@yahoo.co.jp

第三弾　外国人の定着度を高めるシリーズ！！

106 人の日本人職員に「言葉の使い方」を聞き取り調査した

【価値観の四つの視点】
1，大局的に観る　2，総合的に考える
3，体系的に創る　4，継続的に行う

※ 本号は日本語の特徴である助詞と類義語を取り上げて日本人の言葉の使い分けを調査した。　言葉の使い方は時代と共に変化するからだ。

※ 言葉の使い方には強制的な決め事はない。　自分の思いや考えを正確に伝えるためには言葉の概念が一致して意志疎通する。　これが価値表現だ。

Ⅰ、【物に対する意志表現は、助詞で変化するか？】（表 1 参照）

A、 日本語の助詞は前後の言葉を強調するだけではなく、発話者の心情や価値観を表す言葉として使い分けられている。　日本人間においても、発話者の意志で話題の流れや場面で瞬時に使い分ける能力を持っている。　この能力は、助詞の少ない外国人からみると、驚きの能力と言える。　だからこそ、外国人には難しい。

B、 助詞の使い分けによって、発話者の心情や価値観が自然に聞き手側に伝わっている。　よって、言葉の心情表現だけでなく、助詞の使い分けで心情表現する日本人も多い。
例えば、「が」を多く使う人は【我が強い人】と日本人社会では思われるので、できるだけその心情を隠して【我（が）を（は）に置き換え】て、潜在的な心情を隠す傾向がある。

C、 「で」は結果・手段・場所を表わす助詞で、限界の意味を有するので、その心情は「諦め・控え目」な意味合いを持つために、消極的な人が多く使う助詞だ。

Ⅱ、【人に対する意志表現は、助詞で変化するか？】（表 2 参照）

A、 「日本語の助詞の使い方は対象物によって異なる」という原則から見ると、同じ助詞例えば「が」であっても、対象物が物であれば、嗜好物として捉え、その中の選択をしているに過ぎない。しかし、対象物が人の場合は、同じ「が」であっても嗜好の範囲ではなく、自分自身の人生観から判断をした「が」であるために、単純な選択・強調の「が」でないものに変質している。

B、 **表 2** の回答では、男性の回答は半々だったが、女性は 20 名中 1 人だけ「が」を選び、他は全て「で」であった。　この傾向は、前述した人生観から生じていると見てもよい。　女性が圧倒的に「で」が多かった理由としては、日本社会での女性の社会的地位が高まり、その結果、優遇される生活を経験していることにあると言える。　この「で」は結果の「で」ではなく、手段の「で」として捉えるべきだ。

C、 この質問に対する回答時間は、女性は瞬時に答えたが、男性は女性の 3 倍程の時間を有し、答えることが難しいという反応が多かったことが特徴だ。

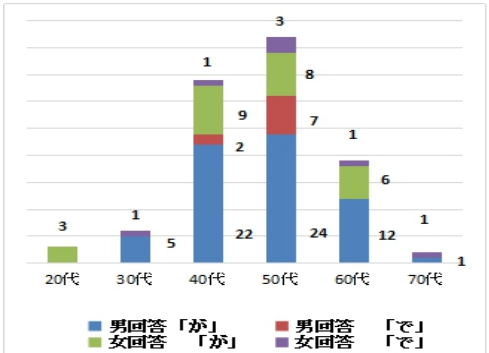
Ⅲ、【言葉の使い分けで、その人の価値観が表れる！】（表 3 参照）

A、 「美しい」は和語で自然の美を表わす言葉だ。　その反対に、「綺麗」は漢語で、仏教と共に輸入された人工の美を表わす言葉だ。「かわいい」は和語だが、子供や小さな物に使う言葉だ。

B、 この三つの言葉は「美」に対して使うが、【表面の美と内面の美】に対して使い分けをする。　例えば、**表 3** の使い分け表では「綺麗」が最も多く、反対に「美しい」は少ない結果だった。

C、 表面の美を表わす「綺麗」は人工的に美を創り出す技術が発達したために、表面の比較だけをして美を表現する傾向にある。内面の美を表わす「美しい」は内面であるためにその美が判別しづらく分かりづらいために、表現としては減少している。

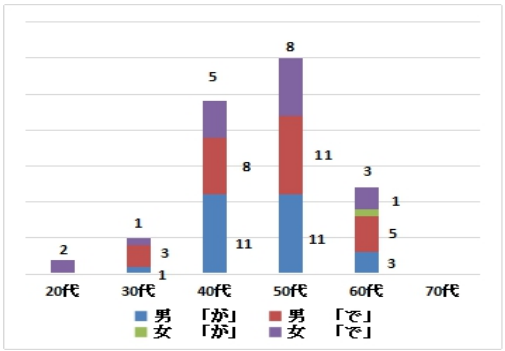
表 1．ラーメン「が」・「で」いいですか。



※ 「が」を選択した男性は 50 代が一番多い。女性は 40 代が一番多かった。

※ 「が」は嗜好品の場合、強調する意味合いが全面に出る。しかし、「で」は消極的な選択の意味合いが感じられる。

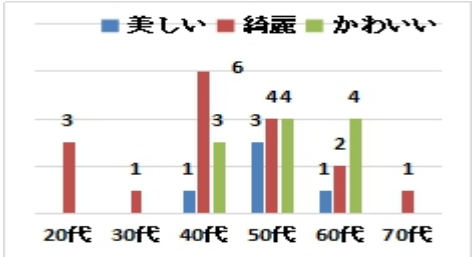
表 2．男「が」・「で」いいですか。
女「が」・「で」いいですか。



※ 「が」を選択した男性は、40 ・ 50 代が多かった。　女性は 60 代が 1 名であった。

※ 人生観が表れるこの質問は、男性は社会で責任を負わされる場合が多いことを反映している。　なお、1 名の女性も責任者であったことから、助詞「が」の意義がより明確に表れていると言える。

表 3．言われて嬉しい言葉は？



※ 「綺麗」は全世代が選び高い比率を示した。「美しい・かわいい」は 40 代～60 代が選び、20 代と 30 代は選んでいない。

※ 言葉の使われ方は時代と共に変化する。

入職半年後には、家族対応ができるようになった！
利用者家族への手紙が書けるので、楽しい（第二弾）

※ 本号では、**2025 年 6 月**に入職した特定技能生に対して、ことばの研究社が教育実施をした 1 年間の結果を前号に続き、本号で連続公表することにした。

※ 2 回目の掲載者は、入職時に行ったことばの研究社の**「10 分間テスト」**結果では 1 名は 20%、他は 0%だった。　入職時は日本人の 4 歳児以下のレベルだった。

※ 教育の効果を見るために、【質問内容】に沿って、日本語文で文書表現することを求めた。　その結果を原文のままで、下記に公表している。

※ 原文には一切、加筆並びに修正は行っていない。
このことを考えて、特定技能生の日本語文を熟読してほしい。　なお、「K さんの答え」が**「10 分間テスト」**で 20%とっている。　このことを考慮すると、他の者より文の質が高く、また、語彙の使い方が適切で正しく使われていることが分かる。

【 質問内容 】

1. **何か月目で夜勤に入りましたか？**
2. **【特記事項】気づいたことを介護日誌に書くことを何か月目からしましたか？**
3. **利用者の家族対応をいつから始めましたか？**
4. **地域の日本人（施設以外の人）と話をしていますか？**
5. **勉強する前としてからで、今の日本語力はどうですか？自分でどう感じますか？**

1 年前の自分と、今の自分の成長をどのように感じているかを、宿題にしたので、ご紹介する！

R さん（ミャンマー人・女 21 歳）の答え（原文のまま）

1. 仕事を始めた時は、先輩と一緒に夜勤をしました。一人で夜勤をするようになったのは、仕事を始めて**8 か月目**からです。
2. **2 か月目**から特記事項を書くようになりました。
3. 仕事を始めた時から、利用者さんのご家族が来た時に話をしています。
4. 近所の日本人の方と、あいさつをしたり、少し話しをしたりしたことがあります。
5. 勉強する前は、日本語を話す自信がなくて、まちがえるのがしんぱいすることがおおかったです。
でも、今は前より日本語を話せるようになって自信もつきました。

K さん（ミャンマー人・女 26 歳）の答え　（原文のまま）

日本に来て 1 年が過ぎました。　この 1 年間でいろいろなことを経験しました。

1. 2025 年 6 月に仕事を始めて、最初は先輩と一緒に夜勤をしていました。　**5 か月目**の 11 月から、一人で夜勤をするようになりました。
2. 仕事を始めた最初は先輩に教えてもらいながら、仕事をしました。　**2 か月目**からは一人で仕事をするようになりました。それから、介護記録も自分で書くようになりました。
3. 11 月から利用者のご家族に渡す「そよかぜ」を書くようになりました。　ご家族が施設に来た時はあいさつをしたり、質問された時に答えたりしています。　まだたくさん話すことはできませんが、できるだけ自分から話すようにしています。
4. 仕事以外では、まだ日本人の友達はいません。　でも、アパートの下の階に住んでいる日本人の方と会った時にあいさつをしています。　これからは施設以外の日本人の方とも少しずつ話すようにしたいです。
5. 日本に来たばかりのころより、日本語が少し分かるようになりました。　仕事で使う言葉や、利用者さんとの会話も少しずつできるようになりました。　まだ分からない言葉やうまく話せないこともありますが、前より自信がありました。
これからも勉強を続けて、もっと日本語が上手になりたいです。　1 年間終って、いろいろなことを勉強することができました。　これからも仕事と勉強を頑張りたいと思います。
よろしくお願いいたします。

P さん（インドネシア人・女）の答え　（原文のまま）

1. 日本に来て **6 か月目**から、夜勤に入りました。
2. 日本に来て 1 か月ぐらいで、せんぱいに教えてもらいながら、介護日誌の特記事項を書くようになりました。
3. せんぱいやリーダーがつかずに、一人で仕事をするようになってから、利用者様のご家族と話をするようになりました。
4. アパートの近所の人にあいさつをしたり、少し話をしたりします。
5. 勉強する前は、日本語をあまり話せませんでした。勉強してから、少しずつ日本語が分かるようになりました。　まだまだですが、前より日本語で話せるようになったと思います。

【 みんな日本語で話そう！ 】



【 職場では日本語だけで話そう！ 】

全国の施設では、外国人が多くなればなるほど、同国人が集まり、母語で話す状態が多々見られる。その結果、職場の雰囲気が「国際化という状態」を引き起こしている。　母語を使って話せば話すほど、日本語力は高まらない。
日本語を習得させるには、仕事を通じて習得することも、とても大切なことだ。　だからこそ、同国人同士の会話でも、日本語を話すべきだ。

施設の声

意見が通らない施設の悲痛な声！

- EPA を継続的に受入れてきたが、帰国者が多い。合格者二人はいるが、妊娠したり帰国を希望する者もいて定着は厳しい。　担当者である私の個人的な意見は、EPA は学習時間を取らなければいけなかったり、手間暇がかかっているわりに人員確保になっていないと思っている。
- 合格しても「帰国者が多い」ので、現場が大変だという声を上に挙げて、意見も出しているが、法人が EPA で受け入れるという方針で変わらない。現場の状況などを考慮して意見しても、法人の考えは変わらないのが現状だ。（広島県・T 施設）

転職者に頼る施設の理由！

- 特定技能生を６名受け入れていた。　その内の４名は、既に夜勤に入れるまでになった。　支援機関を使っているが、直接、施設独自で採用している者の方が多い。　なぜなら、施設が自分で人物選択ができるからだ。
- 地方からの転職者も採用している。　採用面接で必ず転職理由を聞くが、その中で多い理由は、前の施設が「母国よりもだいぶん田舎だった」という声が結構多い。　日本のイメージを母国にいた時に、大阪や東京のような所と勝手に想像している外国人が多いのではないかと思う。　来て見たら相当な田舎だったので、東京の施設に転職したいという理由が多い。
- 当施設は、EPA は受け入れせずに、特定技能生の転職者を中心に受け入れている。 その理由は、学習時間や教育費用も必要なく、即戦力として働いてもらえるため、法人として経費も時間もかけなくても現場で業務をさせられるから、人手不足の現在、即戦力の人材はとても助かるという考えが経営者にあるからだ。　（東京都・S 施設）

能力把握ができていない施設の声！！

- 特定技能生を数年前から受け入れ始めて、結構な人数が在籍している。　支援機関が日本語学習を指導している。　その上、自学をしている人は、インターネットなどを使って、日本語学習をしているようだ。　支援機関が日本語能力試験の指導をしている。　マークシートの勉強だけではなく、その他にも、何か模擬試験のようなものも受けいているようだ。　学習を確認したりはしていないので、どんな試験なのかは、把握はしていない。支援機関と本人達に任せている。
- 日本語文を書けるかどうかの構文レベルを測る試験は受けさせたことはない。　個人の能力によって差があるので、現場での課題はあるかと思う。それは仕方がないことだと割り切っている。

（広島県・S 施設）

育てる事を諦めた施設の声！

- EPA を受け入れていた時は、学習時間を取らせたり、合格させないといけないなあという気持ちが職員にあり、精神的にも大変だった。
  しかし、合格出来ても家庭の事情で帰国したり、定着していた人も途中でいなくなってしまった。
  そんなことが続いたため、EPA の受け入れは止めて、今では特定技能生に切替て受け入れしている。
- 特定のメリットは、学習時間を取る必要もないので業務に専念させられるから、シフトの調整もしやすく、非常に助かっている。　支援機関は複数と契約している。　一社は、日本語教育がついているので、本人達の学習意欲も継続している。
  もう一社は、教育はついていない。　法人としても教育にはお金は出さない。　そのため、専ら、自学学習になっている。
- しかし、数年前とは違い、田舎でも日本語教師が近くですぐに見つかるので、先生に依頼することも検討し始めた。
  自学をする人、しない人がいても、構わない。
  国家試験に合格しようがしまいが、構わない。
  合格できないなら、帰国するしかないのだから。
  法人としては、また、支援機関に依頼して新しい人を雇えば良いという考えに切り替えた。
  EPA の時は長いこと働いてほしいという気持ちが強かったが、割り切るようになった。

（和歌山県・R 施設）

移動者が多い施設の声！

- EPA を受け入れていたが、今では特定・技能生を受け入れしている。 EPA にはメリットを感じなかったからだ。　当施設には 10 名、法人全体で 40 名の外国人人材が在籍している。　ミャンマー人がメインだが、一部インドネシア人も在籍中だ。
- 入職して１年程したら業務に慣れ、夜勤が一人でできるようにしたい。　国家試験の希望があれば定着も考えられるので、そうなるように育てていきたいとは思っている。　しかし、夜勤では日本人が必ずいる体制にはしているので、何かあれば日本人が必ず対応してしまっている。　そのため、一人立ちで夜勤はできていないのが実態だ。
- 月１回程度、支援機関が日本語教育をしているくらいで、その効果も見えてこない。　そのため、今後国家試験に受かるかどうかも分からない。
  半年ほどで他施設に移動する人もいるが、お金は戻ってこない。　欠員が出たらまた受け入れをするという状態だ。　給料の良いところへ移動したり、友達がいる所へ移動したり都会への移動は多く、もう仕方ないことだと諦めるしかない。
  移動したい気持ちを止めることもできないから。

（茨城県・H 施設）